

## 文章・文体

木坂基

## 一 総説

この分野は、「文章・文体」という併記が示すように、幅広い領域を包みこみ、目的、対象、方法などが多様である。そのために、これまで、この分野の展望執筆者から、類別の困難さ、体系志向の弱さ、言語学的実践の不足などが厳しく指摘され、いくつかの反省期を経て今日に至っている。最近、文章研究の開拓の問題が学会でも取りあげられ、また、文法論的文章論や古典の文体研究、文章の史的研究などに精力的な成果が公表されており、「検討すべき課題」(西田直敏「国語学」145展望、昭61・6)を残しながらも、この分野への関心は高くなっていると思われる。

## 一 (1) 単行本・雑誌特集など

まず、単行本では、文法論的文章論として、

①永野賢『文章論総説』(朝倉書店、昭61・5) ②同『国語教育における文章論』(共文社、昭61・6)がある。それまでの研究の「荒削りな部分」(①はしがき)を補充して集大成し、「一つの理論体系を完成」(同)させたものである。永野氏には、文章という構造体の統一原理を文法論として追求し、それをふまえて国語教育における文法の位

置づけを明確にするという基本的立場がある。豊富な具体的用例を使って論が展開されており、かつての接続論から、語る主体をも見すえた連鎖論への新しい展開が期待される成果であった。①については、鈴木英夫氏の書評(『国語と国文学』昭62・3)がある。

③林四郎『漢字・語彙・文章の研究へ』(明治書院、昭62・2)は、著者四冊目の論文集である。「漢字研究への道」「語彙研究への道」「文章研究への道」の三部から成っており、そのうちで文章研究に関するものが本書の約半分を占める。文章論、文体論、談話行動、表現論などにわたっており、今後この方面が参照すべき部分は多い。

④安達隆一『構文論的文章論』(和泉書院、昭62・8)は、文の質的差異に着目して、文章の内的成分を認定し、その成分に基づいて文章構造の記述および文章の内的法則の解明を試みたもの。構文的文章の成立を目ざして、独特の文章研究の方向を切り開いた書である。

そのほか、⑤『応用言語学講座第六巻 ことばの林』(明治書院、昭61・3)に、「C文字とことば」の項があり、万葉、源氏、連歌、西鶴、漱石などについての論がある。⑥山鳥銳男『鷗外の語法』(和泉書院、昭62・3)は、一作家を対象とした文法研究としてユニーク

な書であり、今後資料性が高くなるものと思う。⑦「表現学論考 第二」(今井文男教授古稀記念論集刊行委員会編、昭61・4)は、序章に、今井文男「くぐる視点と浮かぶ視点の一効用」を置いて、以下第一章「言語」から第十章「表現論史」まで、十領域にわたって四十一編の論文を収める。表現研究の現在の水準を示しているといつてよいであろう。なお、高橋享「物語文芸の表現史」(名古屋大学出版会、昭61・11)は、記号論的テキスト観による物語論として、一読に値する。

雑誌の特集では、まず文章論関係として、⑧「日本語学」(昭61・10)に、「文と句の接続」⑨「表現研究」(昭61・9)に「連文論の分野の特集」、⑩「日本語学」(昭62・9)に「接続」がとりあげられ、時代別連接事象とその問題点、接続論の諸説(⑧)、接続の問題点、文・文章・段落と接続、近代文学・中古文学・国語教科書・言語習得と接続(⑩)などが論じられた。表現・文体関係では、⑪「国文学」(昭61・1)が「日本語のレトリック」を集集し、理論的、史的レトリック論を展開している。また、⑫「日本語学」(昭62・11)は、「文学の文法」を集集し、古典の文法と表現、現代文学のレトリック、視点論などがとりあげられた。⑬「国文学」(昭62・11臨刊)では、「日本人のための日本語セミナー」が特集され、「レトリックの焦点」(表現の場とかたち)「日本語の世相」などの項で、さまざまな表現様式におけるひろがり、効果、作法が多角的に論じられている。このような特集が組まれる背景には、新しい日本語学的な観点から、日本語、日本語表現を見直すという意図が働いているように感じられる。この傾向はまた、最近の記号論で、言語のテキストの意味作用による規則を変える創造性への注目がなされ、文を超えた対象や規範か

らの逸脱としての文学のテキストに、言語研究がどう近づくかという問題提起がなされている方向ともつながる。⑭「表現研究」(昭62・9)が「記号と表現」を集集したのも、こういう流れに対する問題意識に立つてのことであろう。

## 一(2) 論文の動向

この分野をさらに、(一)一般的研究、(二)個別的研究、(三)史的研究の三領域に分けると、論文の比率では、ほぼ(一)三〇%、(二)五〇%、(三)二〇%となり、(二)個別的研究が従来通り圧倒的に多い。(一)一般的研究では、まず、文段論(パラグラフ論)(佐久間、野村)に意欲的な研究がみられた。談話分析においては、あいさつことばの順序性に関する新しい試み(甲斐)があった。また、数詞・助数詞と文体に関する考察(神鳥、岡本)が興味をひいた。比較表現論も盛んになってきた。(二)個別的研究では、さらにいくつかの領域があるが、とくに、語詞と文体、表現論(表現法、比喻表現)などに関するものが相変らず多い。(三)史的研究では、明治文語の成立に関する一連の研究(岡本、進藤)に進展をみた。また、言文一致文、口語文の成立に関する論(中島、林)、江戸の翻訳文体についての考察(岡田)などが注目された。

## 二 一般的研究

### 二(1) 文論、接続論、段落論

①早川勝広「文の類別の観点——表現文法序説——」(『学大国文』29、昭61・3) ②平澤洋一「文章における意味の接続」(『都大日本語研究』8、昭61・12) ③糸井通浩「転換——上部接続論に学ぶ考える——」(『国語表現研究』3、昭61・12) ④佐久間まゆみ「文段」認定の一基準(1)——  
「提題表現の統括——」(『文芸言語研究 言語篇』(1)、昭62・1) ⑤野村真木

夫「現代日本語のトピック・センテンス——パラグラフ論への試み——」(「弘学大語文」13、昭62・3)同「パラグラフにおける文の展開について」(「表現研究」44、昭61・9)

①は、いわゆる文分類のあり方に関して、現象文、判断文などの指定について諸説を紹介して、個別的表現と一般的表現という対立枠組を設定し、これによって表現を読みとりたいとしている。文類別から語類別までをめざす今後の進展が期待される。②は、文章の「意味」の総体を把えるには、すべての連接の方向と方法を扱えばよいという考えに立つて、二葉亭の『浮雲』の例から連接型とその機能について考察したものである。③は、いわゆる広義の連接論の可能性をもつ土部弘氏の文連接論の継承をうたつて、文章の全一性把握のキイポイントとなる「転換」を論じている。④は、文法の文章を志向する立場から、内容上のまとまりの相対的な区分による「文段」という仮説的単位を設定し、実際の文章例の観察をふまえて、その成立条件や性質、構造の特性を記述するために、提題表現の種類、統括力などについて緻密な論を展開している。⑤⑥は、一連のパラグラフ論の成果で、トピックセンテンスにかかわる任意の規模のまとまりとしてのパラグラフの機能と言語要素、条件について論じ(⑤)、パラグラフにおける文の展開を叙述される対象の概念関係と状況概念のありようの交差(⑥)などについて独自の考察を深めている。

## 二(2) 文法と文体

⑦糸井通浩「小説冒頭の「は」と「が」(「寛書」)」(「京都教育大国文学会誌」、昭62・6)⑧松田剛史「小説の中の文体——時制を中心に——」

「大谷女子大国文」17、昭61・12)

⑦は、既知「は」未知「が」の情報を受けるといわれる「は」文と「が」文について、近代小説の冒頭での用法が、作者の方法や文体とのかかわりでどんな表現性を見せるかを論じている。⑧は、小説の読者の、指示された世界と再構成された世界とを混同する問題を、小説の時制形式「スル形」「シタ形」などの文法的性格、互換性などについて、表現論的観点からふまえて論じたもの。

## 二(3) 語彙・語彙と文体

⑨神鳥武彦「現代小説と数詞——作品形象と数詞とのかかわり——」(「国文学」108合併号、昭61・3)⑩岡本勲「近代作家の数詞助数詞」(「日本語学」、昭61・8)⑪金井史「和歌表現と接続助詞——三代集を資料として——」(「国語国文」55—3、昭61・3)⑫十五直子「色彩語研究——散文中の色彩語の出現は、何の影響を受けるのか——」(「国文研究と教育」10、昭62・7)

「数詞語彙は文体研究の一つの指標となる」(「中世文学と数詞」武蔵野文学」32、昭59・11)という前田富祺氏の問題提起以後、数詞と文体に関する研究が今期もみられた。⑨は、現代小説四作品の数詞を調査し、主題と数詞との結びつきを論じている。⑩は、明治期小説の数詞助数詞の、字音語と和語、文脈中の意味、出自等々にわたつて、諸作家による用法の違いを述べている。⑪は、短歌の文数通減に働く接続助詞を三代集について調査し、形態統合、使用制限など四つの均衡を歴史的に規定したものであることを指摘している。⑫は、散文中の色彩語の出現が、普遍的な立場、書き手の精神的な変動、書き手の認知の仕方などによって影響を受けることを明らかにしている。

## 二(4) 比喩表現論

⑬多門靖容「比喩の史的的研究について」(名古屋大学国語国文学)59、昭61・12) ⑭上森鉄也「古典における擬人法の認定に関する一考察——『風をだに恋ふる』の比喩法——」(『語学と文学』17、昭62・3) ⑮平澤幹一「ことばの記号性と表現性——あるいは比喩の意味と使用」(『表現研究』46、昭62・9) ⑯楠見孝「比喩表現の理解過程——その認知心理学的分析——」(『表現研究』46、昭62・9)

⑬は、比喩研究の方法について論じたもので、作品文脈とのかかわりの深さについての提案は示唆に富む。⑭は、万葉の表現をとりあげて、比喩認定の問題を論じたもの。⑮は、テキスト言語学を応用した比喩論、⑯は、比喩表現の理解を支える記号体系と語の意味構造の問題をとりあげている。

## 二(5) 比較表現論

⑰前田尚作「連体表現の日英照合——「コト」表現と「モノ」表現——」(天理大学学报)192、昭61・9) ⑱長谷川泰司「谷崎潤一郎『細雪』の仏訳について——日仏比較文体論研究ノート——」(『文体論研究』33、昭61・11)

日本語と他言語との比較表現論、対照言語学的研究が最近盛んである。⑰は、構文論的観点から、日本語の連体表現が英語の文表現に対応するのはどういふ場合かについて論じ、⑱は、翻訳論の立場から、小説の仏訳の、いかにも日本文らしい文をフランス文に反映する手法についての問題点をとりあげている。

## 二(6) その他(文体一般 談話分析など)

⑲安良岡康作「個性的文体の考察(その三)」(『専修国文』4、昭62・1) ⑳甲斐睦朗「日本語のあいさつ言葉の構造——昭和三十年後半の川のある下町の話を例にして——」(『国語国文学報』昭62・3) ㉑西村享「『悪態』の考察——言語表現の芸能化をめぐる——」(『芸文研究』49、昭61・7)

その他の領域で目にとまった右の三論文をあげる。⑲は、志賀直哉の描写的文体をとりあげて、作家—人間性—文体の相関を論じたもの。個性的文体については、作品統一への射程と表現とのかかわりをみる必要があるであろう。⑳は、あいさつ言葉の順序性について、川端の一作目を資料に、全用例を取り出し、第一種(6)類、第二種(2)類の型を導き出しており、談話の分析に一つの方法を示した。㉑は言語表現の伝承と型の定着による芸能化について、悪態を取りあげて論じており、表現上談話の規範化ということ注目された。

## 三 個別的研究

### 三(1) 作品・作家の文体・表現構造

①山口康子「今昔物語集震旦部の引用構造——夢語り・冥途語りを中心に——」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』、昭61・3) ②松村雄二「『とはずがたり』文体論断章」(『共立女子短大紀要』29、昭61・2) ③巖谷和人「敬語法からみた蓮如自筆『御文』の文体」(『新大國語』12、昭61・3)

①は、今昔物語の会話文の文体考察、天竺部に続いての引用構造の分析で、直接話法会話文と心中言の比率について述べ、引用構造A～F六類型についてその構造を解明したもの。②は、『とはずがたり』の叙述の客観的進行—出来事を外在的客観的に進行していく叙述の方法と文体とのかかわりを論じている。③は、法語消息をとりあげ、説教文体、物語文体、書簡文体を複合させて成立していることを明らかにしており、文章史の立場からも興味を引いた。

④岡崎和夫「樋口一葉の文体——会話のかたち——」(『解釈と鑑賞』、昭61・3) ⑤木谷喜美枝「樋口一葉の初期小説——文体を中心として——」

〔和洋国文研究〕21、昭61・3〕⑥中村明「志賀直哉の文体」〔解釈と鑑賞〕、昭62・1)

④⑤は、樋口一葉の文体論だが、方法が対照的である。④は会話のスタイルに焦点を当てて、語りの力強き妙味を論じており、⑤は文末形式、文長、描写など多角的な面から一葉の初期小説の文体を論じている。⑥は、谷崎の絶賛によってその文章が模範の信仰になったことによつて、他の作家の描写法との比較を試みている。この領域は、文学研究側からの注目すべき文体論もいくつかみられた。

### 三―(2) 作品文体と語詞・表現形式・段落

⑦深谷友美子「仏足石歌の表現」〔国文学ノート〕24、昭61・3〕⑧塚原鉄雄「熟語表現と段落解釈―伊勢物語の第六段と第十二段―」〔国語表現研究〕44、昭62・3〕⑨南崎晋「大和物語の文章―この表現性を中心として―」〔城南国文〕6、昭61・2〕⑩船越俊太郎「今昔物語集の三つの文章要素―「其レニをめぐって―」〔国語国文〕55―3、昭61・3)

⑦は、類似表現、語彙、助動詞、訓読的要素などの用法を通して、仏足石歌が詠まれた場、享受された場について論じている。⑧は、伊勢物語の章段構成を維持する基本的な方法として「包摂統合による章段構成」(第六段)と「均衡統合による章段構成」(第二十二段)を識別し、段落機能の認識と理解とが、本文解釈から作品論への重要な原点になるといふ塚原理論が展開されている。⑨⑩は、特定語詞をとらえて、語りの手法を論じ(⑨)、作品の出版と基本的文章様式とのかかわりを明らかにしている(⑩)。

⑪永尾章曹「動詞十て十動詞」の用法―志賀直哉『或る朝』における用法を中心に―」〔国語表現研究〕44、昭62・3〕⑫下河部行輝「三島由紀

夫のオノマトペ―『仮面の告白』に至るまでの初期作品について―」〔国語学研究〕26、昭61・12〕⑬岡崎晃一「三島由紀夫の文末表現」〔言語表現研究〕5、昭62・3)

⑪は、「帰って来た」「出て行った」などの形式と文章展開の意味とのかかわりを明らかにし、まとまりの始めと終わりに位置するなどを指摘している。⑫⑬は、三島由紀夫作品の特殊語彙、表現形式をとらえた表現論。対象の言語実態は明らかにされているが、作品主題や文体選択との内面の追求がほしいところである。

### 三―(3) 表現法(描写法)

⑭大木正義「道綱の母の願望表現―巻による違い―」〔解釈〕、昭62・8)⑮小泉和「南北朝和歌の風景表現(浮雲)―新拾遺集の世界―」〔玉藻〕22、昭61・12)⑯堀切実「芭蕉の比較表現」〔表現研究〕44、昭61・9)

⑭は、『蜻蛉日記』の願望表現二十五例を通覧し、心情表現としての巻による偏りを指摘している。⑮は、二条派撰集の風景表現について、『新拾遺集』の浮雲を中心に考察し、京極派との歌風の違いを論じている。⑯は、比較表現句の構造を分析し、芭蕉の文学的発想が、多くの想像を借りた虚構の世界に基盤を置いたものという結論を導き出している。

⑰佐藤美加「芥川龍之介の『鼠小僧次郎吉』の表現―式三馬との比較―」〔国文学論稿〕、昭62・3)⑱佐藤洋一「野火」における自然描写―「空間性」と「内面化」をめぐって―」〔言語と文芸〕100、昭61・12)

⑰は、芥川が三馬の会話表現を引用することで人物の性格描写が成功していることを実証し、⑱は、自然描写をめぐって、主人公の心理との関係、視線、視点の移動などを論じている。

### 三—(4) 修辭法・比喩表現

①補貢田龍昇「万葉集の修辭——枕詞に対する一私見——」(遺稿) (高山国文) 12・13、昭61・12 ②村井幹子「紫式部日記の比喩表現——『夢のやうに』をめぐって——」(中京文学論攷) 7、昭61・10

⑬は、枕詞がなぜ特定の体言にかかるかの意味的根拠を論じたもの。

### 三—(5) ジャナルの文体(表現)

⑭金沢裕之「落語と云話ルール——観客の笑いを手がかりとして——」(都立大日本語研究) 8、昭61・12 ⑮船所武志「戯曲の空間表現——木下順二「子午線紀」の視点構造——」(国語表現研究) 44、昭62・3 ⑯阪口至「紀海音の用語意識(上)(下)——韻律の観点から——」(文献探求) 18、昭61・9 同19 昭62・3

この領域では、落語、戯曲、浄瑠璃のジャンルの成立にかかわる表現研究がみられた。笑いをおこすシチュエーションとしての会話のルール違反(⑭)、戯曲、浄瑠璃の詞章の分析を通じての劇空間(⑮)、旋律生成(⑯)の問題を論じて新鮮味があった。

## 四 史的研究

### 四—(1) 語詞、語彙、表現形式と文章成立

⑰神谷かをる「古今集における『白』」「初」「四季」の語彙——詩(語から歌語へ)——」(研究紀要) 24(光華女子大)、昭61・12 ⑱山本真吾「平安時代の表白文における対句表現の句法の変遷について」(国語学) 149、昭62・6 ⑲遠藤好英「徒然草」の文章試論——文末表現から——」(文芸研究) 114、昭62・1 ⑳坂詰力治「お伽草子の形容詞について——その語彙史の変遷の過程をふまえて——」(文学論議) 60、昭61・2 ㉑新田

文江「近世初期小説に於ける係助詞「なん」について」(大学院研究年報) 16(中央大学) 言語研究科篇 昭62・3

史的研究には、さまざまな視点からの力作が目立った。①は、詩語としての語彙の用法を通して歌語の定着を論じたもの。②は、句表現法の用法を通して駢麗文成立の糸口を求めたもの。④⑤は、いづれも、古典語規範ないし平安朝和文の用法との対応として、その文章性格を論じている。とくに③は、文末形式の用法を思想内容との関連でとらえており、文章史研究の一つの方法を示し、④が、形容詞を、語彙の変遷の過程をふまえながら、語形態上の諸特徴について検討し、中世語と文体とのかかわりを論じた点は、いづれも注目される。

### 四—(2) 修辭法・比喩表現

⑳半澤幹一「万葉表現史における擬人法——人麻呂近江都歌反歌を焦点として——」(共立女子大学文芸学部紀要) 32、昭61・2 ㉑池田和臣「狭衣物語の修辭機構と表現文体」(国語と国文学)、昭61・3 ㉒元岡徳代「今昔物語の比喩表現——直喩表現を中心として——」(太宰府国文) 5、昭61・3 ㉓堀切実「一茶の比喩表現(下)」(文学)、昭61・1

⑥は、表現的立場から、人麻呂歌が擬人法か序詞かを論じ、⑦は、源氏の引用としての「狭衣」の表現の仕組みを、人工美をかたどるまなざしの構造としてとらえ、新古今的の美的散文的先駆であること論じている。⑨は、一茶の表現の二重化構造、多義性についてふれ、比喩表現による新しい意味作用を指摘しており、いづれも読みごたえがある。

### 四—(3) 幕末明治期の文体成立論

㉔岡田梨婆男「江戸の翻訳文体と談話性——蘭語・唐話の翻訳から生まれ

た表現を見る——〔解釈と鑑賞、昭61・8〕⑪中島礼子「国木田独歩に  
おける文語体について——「おとづれ」「わかれ」をとらえて——」〔国士館短  
期大学紀要〕11、昭61・3〕⑫同「独歩」「武蔵野」——その構造と言文一致  
体の成立——」〔文学〕、昭62・5〕⑬林巨樹・北村弘明「漱石と近代口  
語文——付「漱石坊ちゃん」自筆原稿修正箇所（上）——」〔青山国文〕10、  
昭61・3〕⑭岡本勲「明治の少年文学の文章」〔国語国文〕55、昭61・

2〕⑮同「鷗外」「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」の文章」〔国語  
と国文学〕、昭61・10〕⑯同「明治紀行文学の文章——田山花袋・大町桂月  
について——」〔中京大学文学部紀要〕21—3・4、昭62・3〕⑰同「明治  
国学者の擬古文」〔中京大学文学部紀要〕21—2、昭62・3〕⑱同「明  
治文語の多様性——其時態から見た歴史的対象——」〔国語学〕151、昭62・12〕  
⑲進藤咲子「福澤諭吉研究ノート（8）——『文明論之概略』の草稿の考察四  
——」〔論集東京女子大学紀要〕36—2、昭61・3〕

幕末明治期の文章文体の成立については、文学語学両面からの好  
論があり、進展をみせた。⑩は、談話性を濃厚にもつ初期の翻訳文  
体の考察で、近代文章胎動の具体相の一つをみる。⑪⑫は、独歩の  
作品について、文体成立の内的必然性を、構成、モチーフ、現実の  
自然体験、対象把握の態度などの面から考察し、文章史における作  
品の内面と言語形式との扱いのあり方に、一つのヒントを与えてい  
る。⑬⑭は、岡本勲一連の明治文語成立の研究である。この期間  
に、少年文学、鷗外初期作品、紀行文学、国学者の擬古文と対象ジ  
ヤナルは拡がり、文体要素の多様性（⑭）、擬古文性（⑮）、執筆姿勢  
の違いによるスタイルの揺れ（⑯）、中古と明治との混淆（⑰）など  
が明らかにされた。そして、⑱は、これら一連の考察の総括である。  
重層性、多様性としてとらえられる共時相としての明治文語を、そ

れが内包しているバリエーションやゆれと、文章の種類、用途、内容、  
書手、読者の教養や身分などどう関わるかを論じている。⑲は、  
普通文の成立に力があつたと思われる福澤諭吉の文章成立の過程、  
推敲のあとを、各章ごとに、挿入、書き替え、加筆、補筆、削除な  
どについて精緻に検討を加えたもので、文章研究の基礎的作業とし  
て貴重である。

#### 四（4）文章論史・文章研究史

⑳志賀一清「言文一致運動と明治の教育における二つの対照的な  
思想の姿について——書き言葉と話し言葉の間のギャップより——」〔横浜国大  
人文紀要第二類語学・文学〕33、昭60〕㉑宮内徳雄「山片幡桃と福澤諭  
吉との国語・国字論」〔大阪青山短大国文〕3、昭61・2〕㉒鈴木敬司  
「谷崎潤一郎の『文章読本』」〔日本文学誌要〕、昭62・3〕  
この領域は、紙数もつきたので、論文のみをあげておく。

#### 五 おわりに

以上、二年間の研究動向を述べてみた。研究実態をなまましく  
伝えるために、できるだけ多くの論文を紹介した。三つの分野の内  
部領域は、この展望に設定したものよりも、さらに細分できそうで  
ある。しかし、これらの領域が文章研究、文体研究で納得のいく体  
系に組み込まれるためには、言語の表現論としての意味論的側面を  
背景に加え、内面と形式とをいかに融合させるか、研究方法、態度  
から恣意性をいかに捨象するかが課題である。

本稿をまとめるにあたって、できるだけ全時代、全領域にわたる  
ことに努めたが、筆者の力不足のために、取りあげるべき論文の見  
落しも多いかと思う。また、やむをえず割愛せざるを得なかった論

文も数多くある。お許し願いたい。二百余りの関係論文に親しく接して、多くを学び得たことの喜びを覚えるとともに、改めて展望執筆の難しさを身にしみて感じる。

——広島大学教授——